

世界の子どもたちとの経験から

中央区 与野西中学校 教諭 塩井綾子



「日本の子どもたちとかかわりたい。」そう思ったのは、青年海外協力隊としてアフリカ・モザンビーク共和国で美術教員として活動し、「学校」という場所の大切さに気づき始めた頃だった。アフリカの子どもたちと触れ合いながら、日本の子どもたちに、私は何を教えられるのか、自分を試してみたいという気持ちをもちつつ、帰国した。

1年間の臨採の後、4月から初任者として採用され、初めての担任。新しい1年生を迎える入学式の前日、緊張と期待と不安な気持ちを抱えつつ、教室を整えながら、担任としてやるべきことを考え、一つだけ、何があっても担任としてやり遂げたいことを決めた。それは、「受けもつ全ての子どもたちに愛情を注ぐ」ということだ。

それは、アフリカでの生活で、実感したことでもある。様々な家庭環境や出生理由をもつ子どもたちを、アフリカの大人たちは自分の子であれ、人の子であれ、分け隔てなく愛情を注ぎ、養い、育てる。それは、教育の現場でも同じである。なぜなら、発展途上国にとって「子ども」は国を支えていく希望であり、大切な宝だからだ。日本においても、同じことが言えると思う。

では、具体的に毎日の子どもとのかかわり合いの中で、「愛情を注ぐ」とはどういうことか。私にとってそれは、①笑顔で子どもと話すこと。②子どもの話を聞くこと。③きちんと叱ること。そして何より、④子どもを好きでいること。だと思っている。思春期の子どもの言動や態度、人格などは周囲の環境によって変化しやすい。その子ども

の変化にコミュニケーションを通じて気づき、受け入れ、声を掛けてあげることは、子ども一人ひとりを大切にすることに他ならないと思う。「教育を受けること」はアフリカでも日本でも、子どもの当然の権利だが、発展途上国では、小学生や中学生の子どもたちが学校に行けず、働かなければいけない現実がある。

では、日本の子どもたちは「学校」という場所をどう思っているのだろうか。初任者として1年間子どもたちを見つめ、気付いたことがある。「学校」という場所を楽しめていない子どもたちは、「なぜ学校に来なければいけないのか」という漠然とした疑問を常にもち続けているように思う。勉強することや、仲間や先生とのかかわり、学校生活の全てが学びの場となり、未来の自分を支える経験となる。その3年間はかけがえのない貴重な時間であることを、ぜひ実感してほしい。そのことを、これからも子どもたちに伝えていきたい。

発展途上国の教育現場での経験は、私の教員としての原点であり、動機となっている。今、初任者として、これから続く教員としての道のりの中で、子どもたちに私ができることは何か。それを常に考えていきたい。初任者で未熟な私ができることは、まだまだ少ないかもしれないが、子どもの成長にかかわっていく一人の教員として、常に学び、一人ひとりを見つめ、愛情を注ぐ、その姿勢を忘れることなく、子どもたちの笑顔を大切にできる教員になれるよう、努力していきたい。